

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	GrabityLiVE		
○保護者評価実施期間	令和7年 1月 1日		令和7年 12月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	1人	(回答者数) 1人
○従業者評価実施期間	令和7年 1月 1日		令和7年 12月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6人	(回答者数) 6人
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 2月 10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもが安心して過ごせる場として受け止められており、通所に対して前向きな姿勢が見られる。	子どもが落ち着いて過ごせるよう、活動の流れや環境設定に配慮し、見通しを持って過ごせる支援を行っている。 また、子どもの状態に応じて関わり方を調整し、不安や緊張を軽減できるよう意識した対応を行っている。	今後も、子どもの安心感を大切にしながら、興味や関心を引き出す関わりを増やしていく。 安定した通所につながるよう、個々の様子に応じた支援の工夫を継続していく。
2	児童発達支援計画に基づき、子どもの特性に応じた支援が継続的に行われている。	支援計画の内容を職員間で共有し、日々の活動や関わりに反映できるよう取り組んでいる。 子どもの変化や成長を踏まえながら、支援内容を調整することで、一貫性のある支援を心がけている。	今後は、支援計画と実際の支援とのつながりをより意識し、振り返りの機会を充実させていく。 子どもの姿を丁寧に捉え、より適切な支援内容へとつなげていく。
3	日々のやり取りを通して、保護者との情報共有が行われている。	送迎時や連絡手段を活用し、子どもの様子や体調、活動の様子をごまめに伝えるよう努めている。 保護者からの相談や質問についても、都度対応することで安心感につながる関係づくりを意識している。	今後は、共有内容をより整理し、保護者が子どもの成長を実感しやすい伝え方を工夫していく。 必要に応じて面談等の機会を活用し、相互理解を深めていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者を対象とした学びや交流の機会が十分に確保できていない。	日常的な個別対応を中心としてきたため、研修やプログラムといった形で家族支援に取り組む余地が限られていた。 実施方法や内容について、十分な検討が行えていなかった点も要因と捉えている。	今後は、保護者の状況を踏まえ、資料配布や短時間で参加できる形など、負担の少ない方法を検討していく。 家庭での関わりに役立つ情報を中心に、段階的に機会を設けていく。
2	事業所外との関わりや、地域とのつながりを持つ機会が限られている。	年齢や発達段階、安全面への配慮を優先する中で、事業所内での支援が中心となっていた。 外部との関わりを想定した体制づくりが十分でなかった点も課題である。	今後は、子どもの状況に応じて、地域資源や関係機関との関わりを少しずつ検討していく。 無理のない形で外部との接点を持ち、経験の幅を広げていく。
3	安全管理や防災に関する取り組みについて、保護者に十分伝えきれていない。	必要な対応や訓練は行っているものの、その内容を保護者へ伝える機会が限られていた。 日常支援を優先する中で、発信の整理が後回しになっていたことが要因と考えている。	今後は、安全対策や訓練の実施状況について、分かりやすく伝える方法を検討していく。 情報発信の機会を増やし、保護者が安心して利用できる体制づくりを進めていく。